

## 住民の方からの質問に対する回答について

千苺ダムの治水活用について、住民の方から以下の質問があったので、以下のとおり回答した。

### [住民の方からの質問]

河川管理者の千苺ダム治水活用の構想では、予備放流により 500 万 m<sup>3</sup>、洪水期水位活用により 167 万 m<sup>3</sup>、及び水源余力により 260 万 m<sup>3</sup> の合計 927 万 m<sup>3</sup> の治水活用実現を目指しています。

そこで、次の洪水に関する洪水調節効果等を、次の表に数値を入れることによりご教示ください。

### [県の回答]

お問い合わせの件につきましては、下表のとおりです。

(表内の数値及び表下の注記を県が記入)

	ピーク流入量 (m <sup>3</sup> /s)	洪水調節はダムへの 流入量は何 m <sup>3</sup> /s を上 回る量について実施 するのか	洪水調節実施に より、927 万 m <sup>3</sup> の治水容量に貯 留される総洪水 量 (万 m <sup>3</sup> )	甲武橋地点に おける効果
戦後最大洪水 (整備計画レ ベル)	604m <sup>3</sup> /s	140m <sup>3</sup> /s <sup>※1</sup>	600 万 m <sup>3</sup> <sup>※2</sup>	490m <sup>3</sup> /s <sup>※3</sup>
基本方針レベ ル洪水	785m <sup>3</sup> /s	270m <sup>3</sup> /s <sup>※1</sup>	720 万 m <sup>3</sup> <sup>※2</sup>	472m <sup>3</sup> /s <sup>※3</sup>

※1 上段の 140m<sup>3</sup>/s は、主要な実績降雨を対象に、一定量放流による洪水調節方法で治水容量 927 万 m<sup>3</sup> を最も有効に活用できる放流量の検討を行った結果の値である。主要な実績降雨の内、ダムの治水容量を最も使う S58 年実績降雨で一定量放流を 140m<sup>3</sup>/s とすると、所定の容量の中で洪水調節することが可能となるが、130m<sup>3</sup>/s に絞ると、洪水調節時に所定の容量を超えてしまう。したがって、治水容量 927 万 m<sup>3</sup> を最も有効に活用できる一定量放流は 140m<sup>3</sup>/s となる。この一定量放流であれば、他の洪水でも、所定の容量の中で洪水調節することが可能となる。ちなみに、この S58 年実績降雨時の必要治水容量は 890 万 m<sup>3</sup> となる。

また、下段の 270m<sup>3</sup>/s は、主要な実績降雨を 247mm/24h (1/100) に引伸ばした降雨を対象に、上段と同様の検討を行った結果の値である。対象洪水の内、ダムの治水容量を最も使う H16 年型モデル降雨で一定量放流を 270m<sup>3</sup>/s とすると、所定の容量の中で洪水調節することが可能となるが、260m<sup>3</sup>/s に絞ると、洪水調節時に所定の容量を超えてしまう。したがって、治水容量 927 万 m<sup>3</sup> を最も有効に活用できる放流量は 270m<sup>3</sup>/s となる。この一定量放流であれば、他の対象洪水でも所定の容量の中で洪水調節が可能となる。ちなみに、この H16 年型モデル降雨時の必要治水容量は 900 万 m<sup>3</sup> となる。

なお、必要治水容量は、洪水でダムに貯留する量に 2 割の余裕の量と、異常洪水の際に洪水吐きゲートを全開にして貯留水を放流するための対応に必要な量(第 57 回委員会資料 3P31 参照)を加えた容量である。

※2 計画対象洪水 (整備計画 : S36 年実績降雨、基本方針 : H16 年型モデル降雨) に対して、  
※1 で一定量放流した場合のダムの貯留量

※3 計画対象洪水 (整備計画 : S36 年実績降雨、基本方針 : H16 年型モデル降雨) に対して、  
※1 で一定量放流した場合の甲武橋地点での効果量